生活教育キーワード

【子どもの工夫（方法）】

生活教育では子どもをよく見ようとします。その子どものやりたいこと、衝動や興味は何なのだろうか、またどういう問いをその子は持っているのだろうか、と考えます。

生活教育の深さは、それらをつかんでも、すぐに大人や教師がどうしようか、どんな方法で教育しようか、アドバイスしようかなどとは考えないことです（ここが難しい）。

子どもたちは興味や問いを持っているだけでなく、もう問題に挑んで世界を変えはじめています。子どもなりに工夫して、また子どもなりにいろいろな方法を選択しています。ここまでつかむことが子どもの自発性や主体性を見ることになります。

これらを「興味ある現象」としてていねいにとらえてから、今度は教師が主体性を発揮して、〈発達的抵抗〉としての方法を選択します（文献①）。

「文を見直す」ことですと、子どもの書いたものをそのまま尊重して教師が全く手を加えない方法があり、別の極には、徹底して教師が手を加え、ほとんど教師の作品になってしまうような方法があります（文献②）。

「文を見直す」ことについて子ども自身はどんな工夫をしているのでしょうか。

問違えて自分で書き直すこともしているでしょう。筆箱に消しゴムが入れてあるのは、文を書き直す手段を持っていることでもあります。自分で書きたいと思って自分で直しているのです。一方、書きたいことがはっきりしているがゆえに、書いたものがどうもちがうと思ったり、充分自信が持てなくて書けそうにないと思ったりすることもあるでしょう。その時、「先生、これでいいの」「先生、ここだけ書いて」と教師に働きかけて自分の作品をよりよいものにする工夫をするかもしれません。

投げ返したら〈発問〉になるのでしょうか。教育方法の元をたどると、子どもの工夫があります。

（研究部・加藤聡一）

〈参考文献〉

① 田中昌人『人間発達の理論』青木書店、一九八七年、特に七八―七九ページ。

② 冨士原紀絵「国語教育の作文指導過程における『文を見直す』行為に関する一考察――指導に用いられる用語の整理を通して」、お茶の水女子大学紀要『人文科学研究』第十一号、二〇一五年三月掲載予定。